

② 部門の活動 [令和2年度の活動・特色ある業務]

全学教育機構では、それぞれの部門において、大学の中期目標・中期計画などに従い、特色ある活動を行っています。令和2年度の特色ある活動は以下のとおりです。

○総合教育企画部門

総合教育企画部門は、学務企画課（教学システム・IR室）と一体的な活動を行っているが、令和2年度からは、遠隔授業の導入など教育DXの進展に伴いIT基盤センターとの連携強化も進めている。特に、令和2年度はオンラインのFD/SDには力を入れ、20回以上の全学FD/SDを開催した。

4階層質保証システムについては、「茨城大学における教育の内部質保証の実施に関する要項」および「教育の内部質保証マニュアル」としてとりまとめ、教育改革推進委員会において承認いただき運用を始めている。

令和3年度には機関別認証評価を受審するため、学内各所と協力の上、準備作業を進めている。

1. 中期目標・中期計画および年度計画に関連する活動

中期計画8【教務情報に基づく質保証（エンロールメント・マネジメント（EM））】

学士課程から博士後期課程を通して、全学生の学修成果を把握し、学修成果に基づいた効果的な教育改善を行い、教育の質保証につなげる。

そのため、PDCAサイクルを機能させ、確立していくのに必要なデータを確保するため、全学を通じて、学生の授業理解度、満足度に対するアンケート調査の全学的実施体制を確立するとともに、卒業生の進路状況調査、卒業生の能力等評価に対する企業等へのアンケート調査などを定期的実施する。また、IRの体制及び機能を強化して各教員に対する確に教学情報を提供するとともに、後述の全学教育機構などでの分析・評価、改善のための検討につなげていく。さらに、全学教育機構に学生支援部門を設置することにより連携支援体制を強化し、学生への指導に生かす。

令和2年度計画：

入口から出口までの体系化された学生調査情報について iEMDB、FD/SD 支援システムを活用して学内共有を図るとともに、人材養成 Annual Report（学修成果ファクトブック）の紙媒体版も発行して、教育改善情報の流通を強化する。

令和2年度実績

前期、後期の授業終了時に学生を対象とした学修におけるアンケート調査を実施し、その結果について全学教育機構総合教育企画部門会議、教育改革推進委員会などの全学委員会にて共有を図り、各部署における教育の改善の検討に生かした。

茨大生の主な就職先企業を対象に、卒業生においてディプロマポリシーに掲げる資質が身についているかなどを中心にアンケート調査を実施し、結果を全学委員会等で共有し、教育改善の効果の有無、更なる改善の必要性等について検討できた。

iEMDB 及び人材養成 Annual Report の運用化に向けて作業は進められ、これらは次年度にも継続される。

前期、後期の授業終了時に実施される学生を対象とした学修におけるアンケート調査結果から、学修時間の

<p>向上、授業における満足度向上など、授業改善の成果が推察可能となった。</p>
<p>中期計画9【体系的で柔軟な教育システム】</p> <p>国際化等に対応する柔軟なカリキュラム編成を可能にするとともに、体系的なカリキュラムの編成により、学生がより学修計画を立てやすくする。</p> <p>そのため、平成29年度からクォーター制を導入するとともに、平成27年度から導入している科目ナンバリング制度について恒常的な改善を行い、より学生にとってわかりやすいものとする。</p> <p>また、学生のモチベーション向上にむけた指導の工夫、Concept Mapなどを活用した授業内容・カリキュラムの可視化、電子シラバスの活用を含む既存の教務関係システムの統合等による新たな学修マネジメントシステムの整備及び利用率の向上、ルーブリックなどを用いた評価基準の明確化等に取り組む。</p> <p><u>令和2年度計画：</u></p> <p>全学部において学位プログラム制度の導入に向けた検討など、我が国の高等教育に求められる社会的要請を踏まえ、教育体制、内容の改善に関する検討を進める。特に、科目ナンバリング、アクティブラーニングに関する見直しを進める。</p>
<p>令和2年度実績</p> <p>科目ナンバリングの改善をはじめアクティブラーニング科目の明確化など、カリキュラムの体系が学生に理解されやすいようシラバスの改善検討等を行いシラバスガイドの修正版を作成し、教育改革推進委員会において修正内容の周知と次年度シラバス入力 of 徹底及び各部署におけるシラバス入力におけるチェックシステムの強化を図った。</p> <p>シラバスの役割（教育の質の保証、学生との教育に関する理解と合意など）、重要性に関する全学のFDを開催し、次年度シラバスのブラッシュアップを図った（第1回 茨城大学 FDdays：【資料2-A-02】）。</p> <p>リモート授業におけるアクティブラーニングの導入等を促進し教育の質の維持向上を図る一環として、次年度のmanabaの活用に関するFDを実施した（⇒第3回 茨城大学 FDdays：【資料2-A-02】）。</p> <p>学生により理解がしやすく教育の質の保証を確かなものにするシラバスガイドのブラッシュアップ（修正版）ができた。</p> <p>次年度受審する認証評価の根拠資料として十分耐えうる令和3年度シラバスの内容のチェックと修正が各学部研究科も含めてできた。【資料2-A-03】</p>
<p>中期計画20【教員の教育力向上（FD）】</p> <p>エンrollment・マネジメント活動等により教育上の課題を明らかにし、これに基づいて、教員の教育力の向上に取り組む。</p> <p>そのため、教務情報に基づく分析を踏まえ、個々の教員に対して教育上の課題を助言できるような仕組みを構築する。また、これに基づくFDプログラムを検討・開発し、広く受講させる。</p> <p><u>令和2年度計画：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4階層の質保証システムの各階層に対応したFDの内容と実施体制を点検評価し、その改善策とともにibaraki enrollment management data base (iEMDB)を活用したFDを実施して、ディプロマポリシーの達成とカリキュラムポリシーに基づいた教育をさらに推進する。 ・iEMDBをもとに学修成果アニュアルレポートの定期的公表を行い、学内のエンrollment・マネジメントに資する情報を提供する。また、全学統一FD実施日（FDディ）の試行を行う。
<p>令和2年度実績</p>

教育の質保証に関連する全学FD(前期：新任教職員を主とするFD(計3回)【資料2-A-01】，後期は全学教職員を対象としたFD(計3回)【資料2-A-02】)が実施できた。教育の質保証に関する全学FDの試みは初めての取組だったが、今後の年間を通じた計画的なFDの実施に向けて参考となった。

各部局単位で、教育における学生アンケート結果をもとにしたFDを実施し、教育の質の向上について意識を高めることができた。

iEMDBをもとに学修成果アニュアルレポートの定期的公表を行うことで学内のエンロールメント・マネジメントに資する情報を提供していくことに関しては、今年度もiEMDBへの学生の情報入力は着実に進められた。しかし、教職員に情報提供できる段階には至っておらず、次年度に作業を引き継ぎiEMDBの完成を目指すこととする。

2. 令和2年度における各部局でのFD実施状況（とりまとめ）

・学務企画課（教学システム・IR室）とともにとりまとめを行った。

☆：総合教育企画部門においてデータ提供だけでなく話題提供なども行ったもの

取組	主催	実施内容・方法	参加者数
人文社会科学部各メジャーにおけるFD(前期：令和2年6月10日～7月1日，後期：令和3年1月23日～2月8日)	メディア文化，国際地域共創，法学，経済学・経営学，文芸・思想，歴史・考古学，心理・人間科学の各メジャー	各メジャー単位で，指定された課題について議論，改善案を立案した。	令和2年 前期：82名， 後期：82名
人文社会科学部各学科におけるFD(前期：令和2年7月8日，後期：令和3年2月10日)	現代社会学科，法律経済学科，人間文化学科	学科単位で，各メジャーの報告をもとに総括議論を行った。	令和2年 前期：79名， 後期：79名
人文社会科学部におけるFD☆（令和3年3月17日）	人文社会科学部教務委員会	学科FD・メジャーFDの成果と卒業予定者アンケートの結果を学部全体で共有し，議論を行った。	77名
人文社会科学部研究科各コースにおけるFD ※原則，学士課程と同日程で開催	文芸・思想コース，歴史・考古学コース，心理・人間科学コース，メディア・情報社会コース，国際・地域共創コース，法学・行政学コース，経済学・経営学コース	各(新)コース単位で，指定された課題について議論，改善策を立案した。	82名
人文社会科学各専攻にお	人文科学専攻，社会	(新)専攻単位で，各コースの報告をもとに	79名

けるFD ※原則，学士課程と同日程で開催	科学専攻	総括議論を行った。	
教育実践高度化専攻内FD（実施日：令和2年5月21日）	教育学研究科教育実践高度化専攻	Teamsの使い方について説明会を開催し共有した。また連携授業があるため，とくにTeamsにおける外部ゲストの招待の仕方について共通理解を図った。	25名
教育実践高度化専攻内FD（実施日：令和3年3月18日）	教育学研究科教育実践高度化専攻	教職員支援機構の研修会についての報告（とくに振り返りの在り方）。教職員支援機構の研修会の内容について，とくに個人リフレクト及び相互リフレクトの重要性について共通理解をした。	17名
第1回教職大学院FD（実施日：令和2年12月2日）	教育学研究科専門委員会，教職大学院準備委員会	令和3年度教職大学院の拡充に伴い，カリキュラム全般，実習科目，実践研究報告書と実践研究報告会等について周知，検討を行った。	97名 （対面15（内事務3），オンライン82）
第2回教職大学院FD（実施日：令和3年2月17日）	教育学研究科専門委員会，教職大学院準備委員会	令和3年度教職大学院の拡充に伴い，教育委員会や研修センター等，学外教育機関との連携が重要となるため，年間スケジュール，実習内容，外部との連携について周知，検討を行った。	85名 （対面4（内事務1），オンライン81）
教育学部・教育学研究科授業アンケート結果を用いた授業点検FD（令和3年1月27日）	教務委員会，研究科専門委員会，点検評価委員会	教室，専修毎にミニFDを実施した。ミニFD実施後に各自点検レポートを提出した。後日，全体FDを行い，点検レポートに基づきいくつかの教室から点検結果が報告され，それに関する意見交換と情報共有がなされた。	93名
教職実践演習FD（実施日：令和2年10月21日）	教育学部教務委員会	令和2年11月から開講される教職必修科目「教職実践演習」の関係教員を対象にオンライン方式（Microsoft Teams）により実施。教務委員長および各回の演習担当教員が講師として授業の日程，オンラインでの講義・演習の進め方，課題・レポートの取扱いや成績評価方法などを講習した。授業等により参加できない対象者は，Teamsの録画により別途受講。	34名
大学入門ゼミ・大学院共通科目及び	教育学部教務委員会，全学教育機構	教育学部教員を対象に，対面及びオンライン方式（Microsoft Teams）により実施。	50名

<p>遠隔授業に関するFD （実施日：令和3年1月27日）</p>		<p>「大学入門ゼミ」，「大学院共通科目」及び遠隔授業全般に関する学生アンケート結果に基づき，全学教育機構教員が講師として各授業の現状と今後の改善点などを講習した。 授業等により参加できない教員は，Teams の録画により別途受講。</p>	
<p>教職課程の質保証のためのガイドライン及び教職課程学生のICT活用指導力育成に関するFD（実施日：令和3年3月4日）</p>	<p>教育学部教務委員会，全学教職センター</p>	<p>教育学部教員を対象に，オンライン方式（Microsoft Teams）により実施。 教職課程の自己点検評価の義務化に伴う今後の見通し及びGIGAスクール構想に基づいた茨城県内の教育現場におけるICT活用状況等について，全学教職センター教員及び本学特命教員が講師として講習した。 授業等により参加できない教員は，Teams の録画により別途受講。</p>	<p>85名</p>
<p>第1回研究カフェ兼FD （実施日：令和2年6月17日）</p>	<p>教育学部教育・研究支援委員会，教務委員会，大学院専門委員会</p>	<p>「遠隔授業におけるグループワーク，特に，チャンネルを使ったグループディスカッションの試み」と題し，実践豊富な教員からTeamsやFormsを利用した授業展開についての話題提供をする。さらに，これらについて意見交換する。</p>	<p>38名</p>
<p>第2回研究カフェ兼FD （実施日：令和2年7月17日）</p>	<p>教育学部教育・研究支援委員会</p>	<p>教科連携を推進するための一施策として，理科のなかでも地球科学の分野におけるもの見方・考え方について学ぶ。特に，地球科学的な時間・空間・循環の捉え方について学習し，それを教育心理学的な視点で捉え直してみる。</p>	<p>20名</p>
<p>第3回研究カフェ兼FD （実施日：令和2年9月16日）</p>	<p>教育学部教育・研究支援委員会</p>	<p>教科連携推進の一環として，国語のなかでも書字学習の分野におけるもの見方・考え方について学ぶ。特に，寺子屋の時代から連続と続く茨城の書字学習について学習し，その教育効果の変遷を脳科学的な知見も踏まえ，捉え直してみる。</p>	<p>25名</p>
<p>第4回研究カフェ兼FD （実施日：令和2年10月20日）</p>	<p>教育学部研究・教育支援委員会</p>	<p>教科連携推進の一環として，数学，とくに解析学における身近な現象説明，微分積分により導入される現象の観測（モデリング）と観測の復元という2つのプロセスを学ぶ。また，プレゼンテーションにGoodNote5というア</p>	<p>17名</p>

		<p>アプリケーションを使用し、オンラインでの「手書きで板書」の授業実践について説明する。</p> <p>さらに、これについて意見交換する。</p>	
<p>第5回研究カフェ兼FD （実施日：令和2年11月27日）</p>	<p>教育学部研究・教育支援委員会</p>	<p>「研究と教育現場の往還」と題し、美術教育専門とする教員が小学校教員時の教育方法、研究成果の活用、同時に教育現場で出会う様々な事象がどのように研究に生かされたかについて話題提供を行う。それについて、中学校での教職経験を有する教員からの助言も踏まえ、参加者で考える。</p>	<p>21名</p>
<p>第6回研究カフェ兼FD （実施日：令和3年3月17日）</p>	<p>教育学部研究・教育支援委員会</p>	<p>教科連携推進の一環として、社会、そのなかでも人文地理の分野におけるものの見方・考え方について学ぶ。特に、地理的な空間理解の時代変化を、茨城の先駆的な地理学者長久保赤水が残した業績を追いながら確認し、自身の専門分野との関連性について考える。</p>	<p>29名</p>
<p>理学部教育改善FD（令和2年11月18日， 令和3年1月27日）☆</p>	<p>理学部教学点検委員会 理工学研究科大学院学務委員会</p>	<p>1回目は、主に遠隔授業での学生の学修状況および生活状況についてデータをもと議論（現状把握、共通理解のための討論）を行い、2回目は10年分の成績データ解析結果から、改善活動の学生のまなびへの影響について議論を行った。</p>	<p>第1回 61名 第2回 67名</p>
<p>理学部コースFD（令和2年12月から令和3年1月）</p>	<p>理学部全コース</p>	<p>成績分布、授業アンケート結果をもとにカリキュラムの点検を行った。</p>	<p>コース教員全員</p>
<p>理工学研究科博士前期課程、研究科共通科目FD （実施日：令和3年3月25日）</p>	<p>理工学研究科博士前期課程学務委員会</p>	<p>学生および授業担当教員からのアンケート等を元に、授業の優れた点、改善するべき点について共有し、授業の質向上につなげる。特に遠隔授業についての学生・教員からの反応を確認し、より良い遠隔授業の実施方法について考える。</p>	<p>9名</p>
<p>工学部FD研究会（令和2年12月16日）☆</p>	<p>工学部教育改善委員会</p>	<p>本学全学教育機構教員による機関別認証評価で求められる内部質保証システムと工学部の教育改善の取組についての講演・研修、SPODフォーラム参加報告</p>	<p>159名</p>
<p>工学部 推奨授業公開</p>	<p>工学部教育改善委員会</p>	<p>年2回（前期・後期）推奨授業に選出された授業の公開を行い、実践的な手法の共有の場を提供した。</p>	<p>前期 10名 後期 3名</p>

工学部機械工学科 FD ※原則，新課程の学科に 合わせ実施	工学部機械工学科	年2回（前期・後期）当該学科カリキュラム 構成員に対し，授業担当教員からシラバスに 基づく授業内容の説明，学生からの授業アン ケート集計結果・意見を勘案し，優れている 面，改善すべき点について評価を実施。	42名
工学部機械システム工学 科 FD（令和2年10月 14日～27日に全体会と8 分野別点検会議）	工学部機械システム 工学科	同上	101名
工学部知能システム工学 科 FD ※原則，新課程 の学科に合わせ実施	工学部知能システム 工学科	同上	21名
工学部電気電子工学科 FD（令和2年11月16 日）	工学部電気電子工学 科	同上	18名
工学部電気電子システム 工学科 FD（令和2年10 月14日）	工学部電気電子シス テム工学科	同上	34名
工学部メディア通信工学 科 FD（令和2年10月 14日）	工学部メディア通信 工学科	同上	13名
工学部物質科学・生体分 子機能工学科 FD（令和 2年10月28日）	工学部物質科学工学 科，生体分子機能工 学科	同上	前期 16名 後期 31名
工学部情報工学科 FD （令和2年9月14日， 令和3年3月30日）	工学部情報工学科	同上	前期 22名 後期 21名
工学部都市システム工学 科 FD（令和2年9月 18日）	工学部都市システム 工学科	同上	前期 20名 後期 18名
大学院理工学研究科 機 械システム工学専攻 FD （令和2年10月16日～ 27日に全体会と5分野別 点検会議）	大学院理工学研究科 機械システム工学専 攻	同上	86名
大学院理工学研究科 知 能システム工学専攻 FD ※原則，新課程の専攻に	大学院理工学研究科 知能システム工学専 攻	同上	21名

合わせ実施			
大学院理工学研究科 電気電子システム工学専攻 FD（令和2年10月28日）	大学院理工学研究科 電気電子システム工学専攻	同上	27名
大学院理工学研究科 量子線科学専攻 FD（令和2年10月28日）	大学院理工学研究科 量子線科学専攻（工学野）	同上	25名
大学院理工学研究科 情報工学専攻 FD（令和2年9月14日，令和3年3月30日）	大学院理工学研究科 情報工学専攻	同上	前期22名 後期21名
大学院理工学研究科 都市システム工学専攻 FD（令和2年9月18日）	大学院理工学研究科 都市システム工学専攻	同上	前期19名 後期17名
工学部アドバイザーボード	工学部	学部の教育活動及び教育改善等に関する事項について，学外の産学官民のステークホルダーから助言を得る。	28名
工学部機械システム工学科，大学院理工学研究科 機械システム工学専攻 産学連携カリキュラム改良委員会	工学部機械システム工学科 大学院理工学研究科 機械システム工学専攻	学科・専攻の教育活動及び教育改善等に関する事項について，学外の産学官民のステークホルダーから助言を得る。	15名
工学部電気電子システム工学科，大学院理工学研究科 電気電子システム工学専攻 産学連携カリキュラム改良委員会	工学部電気電子システム工学科 大学院理工学研究科 電気電子システム工学専攻	同上	11名
工学部物質科学工学科 大学院理工学研究科 量子線科学専攻（工学野） 産学連携カリキュラム改良委員会	工学部物質科学工学科 大学院理工学研究科 量子線科学専攻（工学野）	同上	25名
工学部情報工学科，大学院理工学研究科 情報工学専攻 産学連携カリキュラム改良委員会	工学部情報工学科 大学院理工学研究科 情報工学専攻	同上	25名

工学部都市システム工学科，大学院理工学研究科都市システム工学専攻産学連携カリキュラム改良委員会	工学部都市システム工学科 大学院理工学研究科都市システム工学専攻	同上	15名
農学部FD（令和2年10月21日）	農学部総戦略・IR委員会	令和2年度4月の学生アンケート結果をもとに新型コロナウイルス感染症下での学生の動向について確認を行い，今後の指導に向けた共通理解を得た。	50名
令和元年度・2年度卒業・修了生の就職状況に関するFD（令和2年12月16日開催）	農学部	令和元年度・2年度卒業・修了生の就職状況について情報共有を行った。（講演：福與徳文教授）	42名
農学分野データサイエンス教育事業FD第1回（令和3年2月17日開催）	農学部	大学共同利用法人・システム研究機構統計数理研究所名誉教授田村義保先生をお招きし，統計科学とデータサイエンスについて学部全体での認識共有を図った。	25名
農学部情報リテラシーFD（令和3年3月4日）	農学部	農学部FD：情報リテラシー 講師：田附明夫教授	52名
数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム令和2年度 関東・首都圏ブロック第8回ワークショップ～農学分野における数理・データサイエンス・AIの教育，研究の展開普及～（令和3年3月25日開催）	数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム，茨城大学農学部	講師：茨城大学農学部 教授 岡山毅，統計数理研究所 特任教授 田村義保，鯉渕学園農業栄養専門学校 教授 大熊哲仁，株式会社フォーカスシステムズ 櫻井伸吾，茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター係長 高田圭太，茨城大学農学部教授・附属国際フィールド農学センター長 小松崎将一	106名 （Zoom 開催）
令和元年度後学期共通教育FD（令和2年11月19日）	全学教育機構共通教育部門会議	令和元年度後学期に開講された基盤教育科目，全学共通プログラム科目，大学院共通科目のFD実施報告	93名
令和2年度前学期共通教育FD（令和3年3月18日）	全学教育機構共通教育部門会議	令和2年度前学期に開講された基盤教育科目，全学共通プログラム科目，大学院共通科目のFD実施報告	93名
第1回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年4月17日）	IT基盤センター	Teams 操作説明・Teams に関するQ&A	195名

第2回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年4月22日）	IT 基盤センター	Teams 操作説明・Teams に関する Q&A	112 名
第3回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年4月24日）	IT 基盤センター	Teams 操作説明・Teams に関する Q&A	69 名
第4回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年5月14日）	IT 基盤センター	遠隔授業 TF からの報告，Teams に関する Q&A	126 名
第5回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年5月28日）	IT 基盤センター	Teams の機能紹介，Teams に関する Q&A	122 名
第6回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年6月11日）	IT 基盤センター	Teams 利用ガイドライン，研究活動での利用，Teams に関する Q&A	80 名
第7回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年6月25日）	IT 基盤センター	Teams の基本的な操作方法（2Q から遠隔授業を始められる方向け）	56 名
第8回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年7月10日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	第1Q 開講科目の受講学生に実施した授業アンケートの結果を紹介，Teams に関する Q&A	67 名
第9回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年7月22日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	教員向け調査結果から見てきた茨城大学の遠隔授業の現状と課題，Teams に関する Q&A	36 名
第10回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年8月6日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	遠隔授業と著作権	61 名
第11回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年9月23日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	遠隔授業の実施方法について（後期から遠隔授業を始められる方向け）	105 名
第12回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年10月15日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	Teams の機能の変更等について，遠隔授業に関する Q&A（Teams の活用，著作権等）	34 名
第13回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年10月29日）☆	IT 基盤センター・全学教育機構	授業実施における著作権法上の留意点，Q&A（遠隔授業全般について。特に技術的な内容）	32 名

第14回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年11月19日）☆	IT基盤センター・ 全学教育機構	学校現場におけるICT化の流れからハイフレックス授業まで、Q&Aコーナー	41名
第15回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年11月27日）☆	IT基盤センター・ 全学教育機構	manabaとTeams、教務情報ポータルの使い分け、Q&Aコーナー	99名
第17回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和3年1月28日）☆	IT基盤センター・ 全学教育機構	遠隔授業/遠隔会議をそつなく行うためのTips、LMS(manaba)の使い方	60名
第19回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和3年3月26日）☆	IT基盤センター・ 全学教育機構	VPNサービスの利用の手引	140名
第20回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和3年3月26日）☆	IT基盤センター・ 全学教育機構	LMS(manaba)の活用方法	76名
第1回FDディ（令和2年12月9日）☆	全学教育機構	令和3年度のシラバス作成に向けて、基本的な事項（学則、大学設置基準）と内部質保証として求められる事項（DPとの関連等）の解説を行った。	177名
第2回FDディ・第16回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和2年12月24日）☆	全学教育機構・IT 基盤センター	教育のDX化も見据えた授業改善を考えるべく学内での実践事例の共有を図った。	115名
第3回FDディ・第18回遠隔授業/テレワークに関するFD（令和3年3月18日）☆	全学教育機構・IT 基盤センター	来年度の授業実施に向け授業支援システムであるmanabaの活用法について説明、全体討論を行った。	265名
新任教職員オリエンテーション（令和2年4月2日）	人事労務課	新規採用教職員に茨城大学の成り立ち・ビジョン・改革、就業規則・教員業績評価、教育システム、学生支援、研究、組織概要およびリスク管理、個人情報保護と情報セキュリティについて解説し、今後の自己のミッションについて整理した。	30名（教員のみ）
第1回新任教員FD（令和2年7月21日）	全学教育機構・人事 労務課	新任教員を主な対象として、指導者及び研究者としての基本姿勢を備えるとともに、学内のシステムに対する理解を深めることを目的としたテーマを取り上げて、説明を行った。 第1回テーマ：「学生と関わる ー支援、配	30名

		慮，コンプライアンスー」	
第2回 新任教職員 FD/SD(茨城大学オンラインFD/SD) (令和2年8月4日) ☆	全学教育機構	新任教員を主な対象として，指導者及び研究者としての基本姿勢を備えるとともに，学内のシステムに対する理解を深めることを目的としたテーマを取り上げて，説明を行った。 第2回テーマ：「茨城大学の教育システムーシラバス，学則，質保証ー」	29名
第3回 新任教職員 FD/SD(茨城大学オンラインFD/SD) (令和2年10月28日) ☆	全学教育機構	新任教員を主な対象として，指導者及び研究者としての基本姿勢を備えるとともに，学内のシステムに対する理解を深めることを目的としたテーマを取り上げて，説明を行った。 第3回テーマ：「データから見る茨大生」	34名

3. FD 以外で各学部等からの要請により情報提供を行ったもの

※教育研究評議会，経営協議会，教育改革推進委員会などでの報告は除く

実施日	催し物名	演題
R2. 11. 13	茨城大学 大学教育シンポジウム オンライン授業の経験と知見を教育改革に活かすために	茨城大学の遠隔授業の知見から教育改革を展望する
R2. 11. 25	同窓会連合会意見交換会	全国の同窓会による在学生支援の現状と課題
R3. 1. 12	理学部アドバイザーボード	茨城大学の新型コロナウイルス感染症対応と理学部学生の状況について
R3. 3. 15	人文社会科学部アドバイザーボード	環境の変化にともなう学生の履修状況についてー遠隔授業および改組の状況をデータから振り返るー
R3. 3. 21	農学部アドバイザーボード	遠隔授業の状況および農学部卒業生の学修成果について
R3. 3. 24	茨城大学パートナーズフォーラム	オンライン授業による学修成果への影響と教育の質保証
R3. 3. 25	教育学部アドバイザーボード	教育学部の主要指標および卒業時・修了時の成果について

4. 他大学等からの要請により本学の教育改善の仕組み等の紹介を行ったもの

実施日	催し物名	演題
R2. 7. 9	鳥取大学 エンrollment・マネジメントに係る講演会	なぜエンrollment・マネジメントを行うのか？
R2. 8. 7	亜細亜大学 令和2年度第2回全学	なぜ教育改善が必要なのか，学修成果を測

	FD・SD 研修会	定するのか？
R2. 9. 4	第 22 回 山形大学 基盤教育ワークショップ	茨城大学の遠隔授業から見えてきた授業の質を高めるいくつかの方法
R2. 10. 1	埼玉大学 FD/SD 研修会	計画を立てる，測る -ロジックモデルと指標による計画立案と進行管理-
R2. 11. 6	会津大学短期大学部 FD 研修会	遠隔授業をきっかけにした授業改善・教育改善
R2. 11. 27	教育の質保証・質向上オンラインセミナー ～After コロナを見据えて今大学ができること～(株式会社朝日ネット)	教育の内部質保証・質向上のために IR ができること
R2. 12. 10	埼玉大学 FD/SD 研修会	教育の内部質保証のために実際にやるべきこと
R2. 12. 18	I R e r 養成講座(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室, 名古屋大学高等教育研究センター)	実務担当者の分析事例(演習)
R3. 1. 12	大学改革支援・学位授与機構 研究開発部研究会(第 10 回)	大学評価で何が変わったのか -内部質保証の理想と現実とは-

5. 自主的に行った本学の教育改善の取組に関する報告

実施日	催し物名	演題
R3. 3. 5	継続的改善のための IR/IE セミナー E2: ロジックモデル&指標策定演習 [国立大学計画立案担当者編](大学評価コンソーシアム)	指標の立て方・使い方-事例・考え方・演習・妥当性-
R3. 3. 22	継続的改善のための IR/IE セミナー 2021 R1: IR 実務担当者セッション(大学評価コンソーシアム)	新型コロナウイルス感染症の影響把握のための IR 活動を振り返って

○共通教育部門

(1) 初年次教育部会

本部会は、新入生必修科目である大学入門ゼミ、茨城学、情報処理の科目群を担当する。

- ・大学入門ゼミは、共通テキストをベースに各部局・学科独自のコンテンツを加え、それぞれの担当で運営されている。年1度のFDによって全体的な問題点等を確認している。
- ・茨城学は地域志向教育の入門科目と位置付けられるもので、当該年度においては新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、急遽 Teams のライブイベントを利用した遠隔授業を余儀なくされたものの、ライブイベントの Q&A 機能を生かして、学生の意見を多く受け付け、それを学生・講師とシェアして講師のコメントをもらうことができた。学生には好評であった。
- ・情報処理の科目群については以下のとおりである。

○情報リテラシー相談室の開設（特色ある業務）

PC 必携化（BYOD）が令和元年度からいくつかの学部で実施されており、本年度からは全学部で実施された。本部門では、学生がトラブルなく PC を授業で利用できるように、昨年度から「情報リテラシー相談室」を設けている。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、急遽 Teams のライブイベントを利用した遠隔授業を余儀なくされた授業が多かったが、その円滑な実施に貢献した。

○FD の実施

令和2年12月25日に情報リテラシーFDを実施した。まず、情報リテラシーについて、アンケート結果を確認した。新しいものの見方や知識・技能を獲得した実感がある学生が全体のほぼ8割を占める。また、授業の理解度は良好であった。全体の満足度も同様に良好であった。積極的に取り組めた学生が7割から9割以上いた。しかし予習・復習の時間については科目によって大きな差があった。将来役立つ課題を設定し、事前に提示すると良いことが指摘された。遠隔授業で十分な学修ができたかというアンケート結果はきわめて良好であったことから、各教員の努力により、高いレベルの授業が提供できたことが確認された。また、数理・AI・データサイエンス教育リテラシーレベル認定校への申請について、篠嶋部会長補佐より現状報告があり、今後申請を検討していくこととした。

(2) プラクティカル・イングリッシュ部会

○部門の活動（特色ある業務）

本年度は期せずして、すべての活動を通して、「感染防止対策をとりながらいかに効果的な語学授業を提供していくか」を模索する年度となった。教員により IT に関する知識のレベルも様々であり、特に初期は新しいツールの対応に苦慮するなど困難もあったが、徐々に全員が各々のノウハウを獲得していくことができた。結果として、多くの知見を得、対面授業が復活しても単に従来の授業の形に戻るのではなく状況によってより多くの選択肢や授業方法を選択できる教員集団に成長しつつある。

・ FD の実施

例年非常勤教員を含めた全体のFDを年に2回、部会員を対象としたFDを年1回実施し、教

育効果の向上を図っていたが、本年度においてはコロナウイルス感染拡大の状況を踏まえて、対面での全体FDは中止の措置を取った。その代わりに以下の形態で3種類のFDを行った。

- ① 新規採用の非常勤講師に対しては年度頭に個々にミニFDとしてプログラム全体の理解、科目担当者との連絡および意見交換等の機会、そして遠隔授業のための情報提供を行った。
- ② 夏にはPEの部会員を対象に、オンラインにて資料を共有、メールによるディスカッションという形で、前年度の授業アンケート結果からそれぞれの科目における課題を明らかにし、カリキュラム改善とプログラム全体の質的向上を検証考察するFDを行った。
- ③ 年度末には全体のFDを行った。今年度は特に遠隔授業のノウハウを共有することを重点目標と定めた。アンケート結果よりオンライン授業を行うに際して多くの工夫を実施し学生からも高い評価を受けている教員を選出し、その具体的な方法をまとめてもらい、資料を専任・非常勤教員全員で共有する、という形をとった。対面での集会は叶わなかったが、有益な情報を共有化できたことは意義深かった。

- **オンラインによる学習相談を行う機会の提供**

前年度までは各コースコーディネータによる学習相談の機会を設けていたが、本年度は感染防止対策としてTeams上で行う形をとり、引き続き実施することができた。

- **ニューズレターによる自律学習支援**

前年度に引き続き、英語学習についての適切な情報提供、学習意欲の喚起を目的として、ニューズレターの発行を行った。ポータルでの告知に加えて、各授業においても認知度を向上させる依頼を行った。今年度は特にコロナ禍において遠隔授業を受ける上での学生の不安を軽減するために内容を充実させた。

この自律学習支援の試みは、授業以外の時間の学生の自律的な学習こそ日本における学習の成否を決定づけるという言語学習観に基づくものである。

- **プレイスメントテスト・クラス配置作業などのオンラインでの実施による作業効率化**

クラスの配置のために入学時に行うプレイスメントテストは、従来は会場を用意しペーパーテストで実施していた。今年度は感染防止対策のために、オンラインで受検できるアルクネットアカデミーNEXTの模擬テストを利用することとし、共通教育Gと情報連携しながら、リモートワークにて配置までをスムーズに行うことができた。このことにより、今後も継続的にオンラインによる効率的なプレイスメントテスト実施が可能になった。

(3) 心と体の健康部会

1. コロナ禍における対応

(1) オンラインでのガイダンスおよびクラス分けの実施

例年、前期および後期受講者を曜日・講時毎に大体育館に集め、クラス分けを実施していたが、

コロナ禍において実施が不可能となった。そこで、教育支援課の協力の元、オンライン上で希望調査を行い、クラス分けを実施した。

（2）対面授業の実施許可が降りない中でも、学びを止めることなく授業を実施

コロナ禍において、対面授業の実施が中止となった。その中で、学びを止めることなく、学生の健康状態を維持する為、どのような形でも授業を実施すべきと判断し、その方法を模索した。結果、教科書を用いた座学と動画を独自で作成および配信（google）することにより、各自が自宅で実技を実施する方法を選択した。

これを実現する為、常勤講師が総力を上げて課題作成に取り組んだ。

- ・座学に関しては、教科書講義資料（ppt）、出席確認および小テストの作成。
- ・動画に関しては、配信内容の検討および撮影、撮影した動画の編集、特定の受講生のみが視聴可能な動画の配信（3つの群から、選択する配置とした。1群：ストレッチング・マッサージ、2群：コーディネーション・ダンス、3群：トレーニング、合計52映像）。
- ・提出物のデジタル化（実技実施計画用プログラム一覧表、オンデマンド教材、学習カード、メンタルヘルスチェック表、ヘルスチェック表 等）

（3）合理的配慮が必要な学生への対応

クラス分けを行う際に「合理的配慮が必要な学生」は自主的に申し出ることになっており、すでに設定されている授業（コンディショニング）への移行等で対応していた。

これに加え、感染するリスクを考え、通学したくてもできない学生や様々な事情を抱えている学生、また、海外渡航の許可を得られない学生（合計14名）に対して、新規授業を立ち上げ、オンライン授業を実施した。

（4）「感染症」の受講者全員に対する授業の実施（前期および後期受講者対象：約1,600名）

例年、1年生対象の授業で「体力測定」を実施しているがコロナ禍においては実施ができなかった。その代替として「感染症」についての講義を全ての授業で行った。

講義の構成は、4つから成っており①感染症の基礎、②がんと感染症、③新型コロナウイルス感染症、④授業・大学生活を送る上での留意点に関する情報を学んだ。

身体活動を通じて、管理するのではなく、受講者の主体的な行動変容を目指し、指導した。

学生への配布資料には、以下の文章を記載し、配布している。

「感染症を知っていても、『できなければ』意味がありません。一人ひとりの感染予防に対する自覚が肝心です。授業を通して適切な感染症対策をつけてください。」

2. 授業改善に関するFDの実施（2020.9.4「身体活動」、2020.9.7「健康の科学」）

令和元（2019）年度後期の受講生アンケートを踏まえて、授業改善FDを行った。

受講者アンケートからは、例年に引き続き「心と体の健康」の授業を通して、自分の「健康」の維持や向上を図ることの意味や価値を見出している姿が伺えた。

今回は、「対面授業」を実施していた時と変わらず「生活習慣記録表」を活用し、レポートを

課した。この課題により、学生は、自らの課題を可視化することができた。その効果から、自らの身体活動量の減少を自覚することができていた。それと同時に、学生は普段当たり前に通学してきた頃を思い出し、当たり前前に歩数（身体活動量）を稼げていたことに気づいたようである。その歩数（身体活動量）を確保する為には、積極的に身体活動量を確保する必要があることを実感した姿がみられた。

3. 布施泰子先生（保健管理センター長および、健康の科学担当者）による授業の取組に関する紹介（2020.12.11 心と体の健康部会構成員，非常勤講師，学務課担当者等11名）

「健康の科学」では、担当する先生によって特徴的な授業が展開されている。現在「健康の科学」は、選択授業として開講している。しかし、「健康の科学」で展開されている授業内容は、大学生活を過ごす上で学生に大切な内容が多く盛り込まれている。そこで、「身体活動」を担当する教員にも共有しておくことが、学生の深い学びに繋がると考え実施した。

今回は、ご自身の授業で「自殺予防」について取り上げている布施先生に情報提供を依頼した。数年前に茨城大学の在学生在が命を落とす事故が起きた。この状況を、部会としてどのように考えていくか、考えた末に開催したFDであった。

布施先生の授業では、自殺予防のための教育プログラム「CAMPAS」の紹介がされていた。このプログラムは、主に3つのポイント「自分の心の状態を理解する」、「自分の心を健康に保つ方法を知る」、「大切な人の危機に気づき、対応できる」で構成されており、メンタルヘルスの知識と正しい理解に加え、自殺予防と危機介入に関しても具体的にまとめられていた。

今回のFDを通じて、授業担当者が日頃行なっている行動「声をかけ、話を聴く（傾聴する）」の重要性が明らかになった。これにより、その異変に気づくことができれば「専門家に繋げる」あるいは「見守る」ことへと繋がり、結果として事故を未然に防ぐことができると考えられた。以上のことから、「身体活動」が必修授業として存在する意味を再確認することができた。

(4) 自然・環境・科学部会（科学の基礎，自然・環境と人間）

○部門の活動（特色ある業務）

1) プレスメントテストの作成，実施支援，統一授業のクラス分け

工学部入学者を対象とした必修基礎教育科目科学の基礎「微積分学」「力と運動」のクラス分けのためのプレスメントテストとそのガイダンス支援のための説明書の作成と、その採点、及び採点結果をもとにしたクラス分けを行った（「微積分学」担当：小西，「力と運動」担当：山崎）。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため、従来の対面形式ではなくオンライン形式としたため、eラーニングシステムに対応できるようにした。

2) 統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について

統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について以下のような活動を行った（「微積分学」担当：小西，「力と運動」担当：山崎）

1. クラスの打ち合わせ会の運営

2. eラーニング教材の作成と改訂
3. 教科書の作成と改訂（編集委員会の立ち上げ，諸設定の検討を含む）
4. 期末試験問題の作成支援
5. 期末試験問題の全体および問題別の統計と全体成績の統計
6. オンライン形式に対応した授業ノートとスライドの作成と改訂（力と運動のみ，2021年度開講授業用だが，作成は2020年度中）
7. 過去の期末問題の整理と統計
8. on demand 動画教材の作成（2021年度開講授業用だが，作成は2020年度中）

3) 授業改善に関するFDの実施（2020年9月9日-16日，2021年2月2日-8日）

授業アンケート，教員評価およびGPAの総合的分析結果を踏まえて授業改善のためのFDをon demand形式で開催した。授業アンケート，教員評価およびGPAの結果を総合的に分析した結果，対象となった授業に関して時間外学習以外においては，改善を強く促すべきものがなかった。時間外学習に関しては，eラーニングシステムを利用した宿題の実施などによる予習・復習や，グループによる時間外学修やプレゼンテーション準備などを通して，授業外の学修時間を確保する工夫は行われたが，一部の科目においての平均実時間は目標時間に達していないものが見られた。ただし，アンケートによる理解度や達成度，GPAを総合的に分析すると，時間外学習の実効果は目標時間分に相当すると判断できる。

FDのon demand形式については，前期開催分は，参加者の約73%（24/33），後期開催分は参加者の約76%（22/29）が，対面式よりon demand形式が良いと回答しており，今後もon demand形式を継続して問題ないと思われる。

（5）多文化理解部会（異文化コミュニケーション，ヒューマニティーズ，パフォーマンス&アート）

■異文化コミュニケーション（初修外国語）

異文化コミュニケーション（初修外国語）においては例年と同じく，ドイツ語，フランス語，中国語，朝鮮語，スペイン語を初歩から学ぶ「Ⅰ」（前学期・週2回）と「入門」（後学期・週1回）が開講された。また，前学期「Ⅰ」の学修を踏まえてその先を学ぶ「Ⅱ」が後学期に開講（週2回）された。コロナ禍によりオンライン授業を余儀なくされたが，各担当教員の努力により，科目ガイドラインに規定された学修を提供することができた。

令和2年7月と令和3年2月には，初修外国語を担当する専任教員によるFDが実施され，特に後者ではオンライン授業の成果と課題を教員間で共有した。履修学生の授業外学修時間はおおむね十分と思われるが，学生の自発的な学修をさらに促進すべく，たゆまず工夫を続けることとなった。

■異文化コミュニケーション（初修外国語以外）

1) 活動（特色ある業務）に関して

以下の短期海外研修を異文化コミュニケーション科目「多文化共生」として開講した。

- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（韓国オンライン）」（ご担当：安龍洙先生）
- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（スペインオンライン）」（ご担当：池田庸子先生）
- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（ブルネイオンライン）」（ご担当：瀬尾匡輝先生）
- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（オーストラリアオンライン）」（ご担当：青木香代子先生）
- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（マレーシアオンライン）」（ご担当：瀬尾匡輝先生）
- ・「短期海外研修Ⅰ，Ⅱ（ベトナムオンライン）」（ご担当：瀬尾匡輝先生）

■ヒューマニティーズ

ヒューマニティーズにおいては、思想・文学、歴史・考古学、人間科学、メディア文化に関して多彩な授業を提供した。

ヒューマニティーズを担当する教員を対象にFDを実施して、課題を共有するとともに、その解決に向けた方策について議論し、改善に努めている。とりわけ、コロナ禍でのオンライン授業の導入については、利便性の向上を高く評価する一方、受講生の反応が分かりづらいことや学生の負担が増加しやすいことなど課題も見られることから、その利点と問題点について情報を収集する必要性を認識している。

■パフォーマンス&アート

パフォーマンス&アートにおいては、比較的少人数授業によりユニークなコンテンツを提供している。例えば音楽文化では独唱やオペラ、美術文化では仮名の書、絵画に親しむ授業、ダンス・演劇文化では水戸芸術館で学芸員から直接学べる授業が開設された。

令和2年度には前期後期それぞれの担当者がオンラインでの問題点などを提示し、その解決策を話し合うなど定期的に見直しを行った。またガイドラインの趣旨と授業内容との関連を同じ分野内で相互にチェックするなどして充実を図った。オンラインでの開講を経験したことによって、より一層少人数での対面でなければ得られない表現活動の理解について確認することが出来た。

(6) 社会と生活部会（グローバル化と人間社会、ライフデザイン）

■グローバル化と人間社会

「グローバル化と人間社会」では国際社会と地域社会に対する理解を深め、社会を対象とする諸科学の基礎学力や課題解決能力を育むことにより、意欲的かつ自律的な人材を育てることに重点を置く。当該年度のFDにおいては、科目すべてについて検討し、学生アンケート結果により、基本計画を十分に達成したことを確認した。一方、授業難度の平準化を図るにあたって、現状の問題点を確認した。特に日本国憲法において、同一科目でありながら成績分布の差が顕著であることが認識された。その解決に向け、前後期ともに、日本国憲法の全先生に、部会としての成績評価の考え方をお伝えすることとした。すなわち、本科目「グローバル化と人間社会」の成績分布の平均は、A+30%、A35%、B20%、C10%、Dと欠5%程度であり、この分布に近づけるようご留意いただくこととお伝えした。また、日本国憲法以外の科目においても、成績評価において、上記の点にご留意いただくこととした。

■ライフデザイン

開講2年目となる「ライフデザイン（1単位・3年次必修）」を学部と連携して開催した。社会に出て活躍できる能力を身に付け、働く意義を理解し、自らの将来に思いをめぐらし、今後の主

体的な生き方を設計できる能力の基礎をつくるカリキュラムを学生全員が履修する。

授業のオンライン化にともない、学生が自らの進路を考えるための基盤づくりを再検討した。従来からの対面形式による「活躍する職業人」の講話から、「職業を知る（業界研究・企業研究）」を学生自身がオンラインで調べる内容に変更した。大学独自のシステム「茨大 career Navi」を利用して、遠隔方式で「業界・企業を知る」方法論を身に着ける内容である。就職活動についても学生が孤立化し不安を抱える状況下の中、本学キャリアセンターからの情報及び「茨大 career Navi」の他機能（相談予約やガイダンス参加など）利用を理解し、支援を得るための準備とした。

身近な社会を知る1年次の「茨城学（必修）」、1年次、2年次を対象とした「仕事を考える（選択）」、「インターンシップ実習（1単位・選択）」、日立キャンパス開講の「キャリアデザイン論（1単位・選択）」と合わせ、大学での学びを活かし、キャリアを考えるための授業をキャリア教育体系に位置付けた。

（7）グローバル英語プログラム部会

○部門の活動（特色ある業務）

中期目標達成のための方策として、GEP 運営上の問題点とその解決策について GEP 専門部会会議を通して協議してきた。中期目標の達成のための施策として（1）学習者のニーズ分析によるシラバス改善（2）受講学生の英語力の二極化による授業難度の設定検討（3）インセンティブ強化の検討をしてきた。また、GEP の質保証として（1）GEP 授業担当者の確保と授業改善（2）令和3年度用シラバスチェック（3）「GEP プログラム科目概要・補足説明」の英語版を授業担当者に配布してきた。

中期計画の目標は、GEP 受講者数が2年次生320名（学年1600名の20%）、3年次生320名（学年1600名の20%）である。前提となるTOEIC550点以上取得者数は、H30；267名、R1；302名、R2；546名と増加傾向を辿っているのに対して、GEP 受講学生数合計はH30年度が87名（導入1年目で2年生のみ）、R1年度が252名（2年次生、3年次生）と全体の7.9%とまだまだ低迷している。履修促進の方策としては、GEP に対する理解、認知度がまだ高いとは言えず、内的（シラバス精査）、また外的（PR活動）アプローチを用いる必要があげられる。

1. GEP 履修促進の方策（GEP の現状と改善点）

（1）学習者のニーズ分析によるシラバス改善

第3・4クォーター終了時にGEP 受講生を対象としてDream Campus 上でアンケートを実施した。主な内容はGEP 科目履修の動機、満足度、要望等。集計・分析は次年度とする。

（2）受講学生の英語力の二極化による授業難度の設定検討

プログラムの導入により受講学生の英語力の二極化により授業難度の設定に支障をきたしていることが学生のアンケート結果及び授業担当者から問題点として挙げられた。そこでGEP 科目の中で、例えばTOEIC 740点以上の上級（Advanced）レベルとそれ以下の中級（Intermediate）レベルを設定するという対応策について協議したが、現状での少ないGEP 科目受講希望者をさらに限定することになるため、現段階では授業運営の中で多様な学生の英語力に対応する施策が求められることとなった。

（3）インセンティブ強化の検討

GEP 受講意欲促進の鍵は、授業内容への関心とインセンティブにある。インセンティブという観点では、例えば農学部の AIMS プログラム参加のように、各学部での GEP 受講メリットが明確になると効果的である。更に、他大学、他学部を参考にしながら留学プログラムの充実を図る（例：千葉大学の全員留学制度や、茨大農学部国際食産業コース全員の留学制度）。

2. GEP の質保証

GEP 各科目のシラバス、授業内容等については GEP ガイドラインに基づき授業担当者個人に任されている。質保証という点でシラバスチェックによる現状把握が必要であるため、令和元年度以来 GEP 部会によるシラバスチェックを実施してきた。評価方法については、GEP の評価基準を設けて次年度の評価の適正化に努めることとする。またネイティブの担当者も多いことから、ガイドラインの英語版を作成し、GEP 各授業の質的向上に努めることとした。

(1) GEP 授業担当者の確保と授業改善

GEP 授業担当者について、水戸地区は人文社会科学部教員が中心であるが、阿見地区、日立地区とも非常勤に頼っている。まず、学生のニーズに合った授業を行える担当者の確保が重要である。プログラム自体の訴求力を上げるために、各科目で改善を図り、学生にとって意義あるものを提供することが重要である。AE IIIC は、GEP へ段階的な準備を行うブリッジ的存在になるように、授業内容の改善や差別化を継続して行う必要がある。

(2) 令和3年度用シラバスチェック

クオリティコントロールの観点から、令和3年度に開講する GEP 科目のシラバスの形式及び内容についての確認作業を下記の通り実施した。

GEP 科目シラバス	担当部会員
TOEIC and TOEFL 4 科目, English for Socializing 2 科目, Studies in Particular Fields 1 科目	小林
Reading & Discussion 4 科目, Studying Abroad 2 科目	岡崎
Studies in Particular Fields 1 科目, Studies in Contemporary Japan 1 科目, Presentation in English 3 科目	瀬尾
Bilingualism 2 科目, Studies in Particular Fields 4 科目	館
Academic Speaking 3 科目, Academic Writing 3 科目	菊池

(3) 「GEP プログラム科目概要・補足説明」の英語版の配布

GEP 科目の質的な向上を図るため、英語のネイティブスピーカー教員用に、各部会員が分担して作成した「GEP プログラム科目概要・補足説明」の英訳を授業担当者に配布し、GEP 授業設計の共通認識と授業の質の向上を図った。

(8) 日本語教育プログラム部会

(1) 活動（特色ある業務）に関して

外国語としての日本語を指導するために必要な専門知識と基礎能力の習得を目的としたプログラムである。人文社会科学部と教育学部の学生を対象としている。人文社会科学部のサブメジャーになっている。

2020年度は前学期1名、後学期14名が本プログラムを修了した。

◎2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中の大学でオンラインによる授業が展開されたことから、日本語教育プログラムの多くの必修科目で海外の大学との授業交流を行った。

【日本語教授法Ⅰ】

10～11月はミシガン州立大学（アメリカ）の初級日本語学習者とオンラインによる交流を計5回行った。学生たちは初回の交流で行ったニーズ・レディネス調査をもとに、ミシガン州立大学の学生に向けた日本語コミュニケーション活動を考え、実践した。1月には、ハイフォン大学（ベトナム）との授業交流を行った。その授業交流では、【日本語教授法Ⅰ】の受講生がハイフォン大学の日本語授業に交代で参加し、模擬授業を行った。両活動には16名の学生が参加した。

【日本語教授法Ⅱ】

6月15日からの4週間はペンシルバニア州立大学（アメリカ）の日本語1のオンライン授業に受講生が数名ずつ参加して授業観察を行い、その後の日本語2のクラスでは7月14日から約4週間、茨大生25名が各自15分の模擬授業を行った。

【日本語教授法演習】

ウィスコンシン大学スペリオール校（アメリカ）、ペンシルバニア州立大学（アメリカ）、アイオワ大学（アメリカ）、ニューカッスル大学（イギリス）、インドネシア教育大学（インドネシア）、マレーシア科学大学（マレーシア）、仁済大学（韓国）の海外協定校の協力を得て、オンラインによる日本語教育実習を実施し、14名の実習生が参加した。

【ベトナム・日本語教育短期海外研修（オンライン）】

参加学生は、3月1日～6日の6日間、毎日11時から14時半、15時半から17時にZOOMにアクセスし、ハイフォン大学が提供するプログラムに参加した。そのプログラムは、ハイフォン大学及び現地の中学校、高校の日本語の授業の見学・参加のほか、現地の先生による日本語教育事情に関するレクチャー、ハイフォン市内の日本語学校・日系企業への訪問、アオザイ試着体験、ベトナムコーヒーの淹れ方紹介等の文化紹介、車窓からの市内ツアー、学生によるランチ紹介など、盛りだくさんの内容であった。研修には3名の学生が参加した。

◎2020年度は、以下の通りオンラインによる海外協定校との授業交流を行った。

- ・【日本語教授法Ⅱ】ペンシルバニア州立大学との授業交流：5月18日
- ・【日本語教授法Ⅱ】ペンシルバニア州立大学との授業交流：7月29日
- ・【日本語教授法Ⅱ】ペンシルバニア州立大学との授業交流：6月15日～8月3日
- ・【日本語教授法Ⅰ】アメリカ・ミシガン州立大学の学生との交流（1回目）：10月12日
- ・【日本語教授法Ⅰ】アメリカ・ミシガン州立大学の学生との交流（2回目）：10月26日
- ・【日本語教授法Ⅰ】ベトナム・ハイフォン大学の学生とのFacebookを介した交流：11月～1月
- ・【日本語教授法Ⅰ】アメリカ・ミシガン州立大学の学生との交流（3回目）：11月9日
- ・【日本語教授法Ⅰ】アメリカ・ミシガン州立大学の学生との交流（4回目）：11月23日
- ・ニューサウスウェールズ大学（UNSW）の学生とのオンライン交流：10月初旬～11月下旬
- ・【日本語教授法Ⅰ】アメリカ・ミシガン州立大学の学生との交流（5回目）：12月7日

- ・【日本語教授法Ⅰ】 ベトナム・ハイフォン大学の日本語教員をゲストに招いた交流：12月18日
- ・【日本語教授法演習】：9月～12月
- ・【日本語教授法Ⅰ】 ベトナム・ハイフォン大学との交流：1月13日、14日、15日、20日、21日、22日

(9) 地域志向教育プログラム部会

1) 部門の活動

①「茨城学」の推進

6年目を迎えた全学生必修の「茨城学」については、全学教育機構初年時教育部会での運営が4年目となった。常勤教員1名・コーディネーター1名の体制となり、業務・工程の見直しを図りつつ、授業の質を担保すべく取り組んだ。多様な分野の教員が茨城の現状と課題、課題解決の取組を紹介し、学生とともに現在と未来を見据えた課題への解決策を考察した。学生アンケートの評価は良好であり、毎回教員が変わること、400人規模の大規模授業であることを考えあわせると、達成度は高いものと思われる。特に当該年度においては新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、急遽 Teams のライブイベントを利用した遠隔授業を余儀なくされたものの、ライブイベントの Q&A 機能を生かして、学生の意見を多く受け付け、それを学生・講師とシェアして講師のコメントをもらうことができた。学生には好評であった。

②「5学部混合地域 PBL」の実施

全学共通科目の「5学部混合地域 PBL」は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ⅣのうちⅠ、Ⅱ、Ⅲが開講された。5学部混合地域 PBL-Ⅳ、地域協創 PBL については、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により不開講とせざるを得なかった。5学部混合地域 PBL-Ⅲ（1年生以上対象、連携先：茨城県、常陸大宮市）では早期の開講を決断し、コロナ禍にあっても十分な感染対策をしたうえで現地での授業を展開したこともあり学生の満足度が高かった。5学部混合地域 PBL-Ⅰ（1年生以上対象、連携先：ひたちなかまちづくり株式会社ほか）、5学部混合地域 PBL-Ⅱ（2年生以上対象、連携先：株式会社サザコーヒー）に関しては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延防止のため延期を決断し、年度末の実施となった。いずれも現地での活動を縮小して本学水戸キャンパスでプレゼンテーション発表を行った。学生満足度は概して高かったが、もう少し現地で活動したかったとの声もあった。

2) 地域志向教育プログラムの修了生

平成27年度から開始された本プログラムも6年が経過し、令和2年度には149名のプログラム修了生を輩出した。

(10) 地域協創人材プログラム部会

1) 部門の活動（特色ある業務活動）

①「茨城学」のCOC プラス参加校への配信

COC プラス事業大学間連携地域志向科目である茨城大学全学教育機構基盤教育科目「茨城学」のCOC プラス参加校への配信は、本年度は毎回の講師に作成いただいた音声入りパワーポイントファイルを配付し、運営を各参加校の担当教員が行った。

令和元年度からはCOC プラス参加校からの講師の登壇が開始された。初回となる令和元年度は茨城県立医療大学の講師が「茨城の医療について考える」を、また令和2年度は茨城キリスト教大学の講師が「地域の子育て事情」をテーマに授業を実施した。令和3年度は常磐大学が「茨城の防災」について、そして令和4年度は茨城工業高等専門学校が「茨城の環境問題」について講義を1コマ担当することが決定している。

3) 地域協創人材教育プログラムの認定

平成28年度から開始した本プログラムも6年が経過し、令和元年度は初めての「地域協創人材」の認定者を6名輩出することができた。令和2年度の認定者は本学で50名であり、プログラム修了者の大幅な増加がみられた。

(11) AIMS プログラム部会

1) AIMS 部門の活動

AIMS (Asian International Mobility for Students) プログラムとは、インドネシア、タイ、マレーシア、フィリピン、ベトナム、ブルネイ・ダルサラーム、シンガポール、韓国および日本の9か国（2020年現在）が加盟する国際共同教育推進プログラムであり、日本からは茨城大学を含む11大学が参加している。AIMSの目的は、「ASEAN 共同体」の持続的発展に資する10分野（農学、工学、食糧科学技術、経済学、国際ビジネス、言語・文化、観光科学、環境管理科学、生物多様性、海洋学）の学生交流を促進し、国際的な視野をもった人材を育成することである。

茨城大学は、2013年度大学の世界展開力強化事業により採択された「ASEAN 発、環境に配慮した食料供給・技術革新・地域づくりを担う次世代人材養成」（幹事校：東京農工大学）に対応するため、AIMSプログラム科目を整備し、環境保全・経済発展における課題解決に向けた国際人材の育成に取り組んでいる。

本学は、地域社会の持続的発展の基礎となる安全な地域づくりと環境保全に主眼をおいた「地域サステナビリティ」をテーマとして、受入学生向けに「環境変動適応・防災論」や「環境共生論」、「環境保全型農業論」など11科目16単位のAIMSプログラム科目を開講している。令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン交換留学生のみの受け入れとなったため、講義科目5科目（環境変動適応論、環境共生論、環境保全型農業論、地域サステナビリティ学特別講義I、地域サステナビリティ学特別講義II）のみの遠隔開講となった。実地留学を伴わない学生受け入れとなり、教育効果の担保や学習意欲の持続が課題と考えられたが、独自に実施した授業アンケート結果によれば「母国の持続可能な発展のために意欲がわいた」という回答は例年よりも概ね高評価であり、遠隔開講であっても学生の主体性や意

欲を引き出すことができた。

2) AIMS 関連イベントの報告

令和2年度は交換留学生の来日を実現しなかったため、例年実施していた地域住民との交流イベント等、地元自治体の国際交流組織との連携事業は一切実施されなかった。授業科目の遠隔対応に時間を費やしたこともあり、授業外での日本人学生との交流も促進することができなかった。本学学生の“世界の俯瞰的理解”や、研究交流を通じた“課題解決能力・コミュニケーション力”の強化のため、今後、授業外でのオンライン交流会の実施などが望まれる。

しかしながら、独自に実施した授業アンケートにおいて、ほとんどの講義科目で半数以上の学生が「問題解決能力の向上」に“大変有意義であった”と回答しており、オンラインでの発表やグループワークを取り入れた活発な授業内容とすることができた。一方、一部科目では学習意欲の顕著な低下がみられ、特に PBL 要素が強い部分では、遠隔での実施方法について担当教員による工夫が必要であることが明らかとなった。

以上により、茨城大学として“環境と調和した多文化共生社会の持続的発展”の実現に貢献する国際教育を展開できることが示された。今後、グローバル教育センターや各学部との連携を深め、多様な国際教育機会を創出していくことで、アフター・コロナ、あるいはウィズ・コロナの時代に向けて、オンラインおよび実地を組み合わせた複層的な教育プログラムの展開が期待される。

【AIMS 受入学生による授業評価結果】

Course Title:	Adaptation to Environmental Change & Disaster Risk			Environmental & Symbiotic Sciences			Environmental Conservation Agriculture			Special Lecture on Regional Sustainability Science I			Special Lecture on Regional Sustainability Science II							
	2020	2019	2018	2020	2019	2018	2020	2019	2018	2020	2019	2018	2020	2019	2018					
(Motivation for sustainable development) (1) The course increased my motivation to work for sustainable development of my country and ASEAN.	2.8	2.8	2.7	0.1	2.8	2.4	2.8	0.2	2.9	2.6	2.7	0.3	2.7	2.8	2.5	0.0	2.7	2.6	2.5	0.2
(Basic academic skills and logical thinking) (2) The course helped me to improve basic academic skills and logical thinking ability.	2.4	2.9	2.7	-0.4	2.8	2.7	2.7	0.1	2.9	2.6	2.5	0.4	2.6	3.0	2.4	-0.1	2.4	2.6	2.3	0.0
(Problem-solving abilities) (3) The course developed my problem-solving abilities.	2.0	2.5	2.4	-0.5	2.3	2.5	2.5	-0.2	2.7	2.5	2.4	0.3	2.0	2.7	2.2	-0.5	2.3	2.4	2.2	0.0
(Specialized knowledge) (4) The course helped me to acquire advanced specialized knowledge.	2.4	2.7	2.6	-0.2	2.9	2.1	2.8	0.4	2.6	2.3	2.6	0.1	2.7	2.8	2.6	0.0	2.7	2.4	2.5	0.2
(Scientific research skills) (5) The course helped me to train my scientific research skills.	2.4	2.2	2.4	0.1	2.8	2.2	2.6	0.4	2.8	2.2	2.4	0.5	2.7	2.6	2.4	0.2	3.0	2.3	2.3	0.7
(Ethics and communication) (6) The course helped me to develop a sense of responsibility for realizing sustainability.	2.4	2.8	2.7	-0.3	2.8	2.3	2.6	0.4	2.9	2.3	2.7	0.4	2.5	2.9	2.5	-0.2	2.6	2.6	2.5	0.0
(Content: Text) (7) Slides not overcrowded, well outlined/organized.	1.8	2.2	2.6	-0.6	2.4	2.2	2.6	0.0	2.5	2.6	2.4	0.0	2.5	2.7	2.3	0.0	2.4	2.6	2.3	0.0
(Content: Language) (8) Upheld and maintained University English standards.	2.4	2.6	2.6	-0.2	2.6	2.2	2.8	0.1	2.6	2.2	2.6	0.2	2.5	2.5	2.5	0.0	2.6	2.2	2.5	0.2
(Encourage participation) (9) The course instructor(s) encouraged students to express their own ideas in the class.	2.8	2.8	2.6	0.1	2.8	2.6	2.8	0.1	2.9	2.8	2.6	0.2	2.2	2.7	2.5	-0.4	2.1	2.6	2.7	-0.5
(Respect for others) (10) The course instructor(s) encouraged respect for different opinions and experiences in the class.	2.8	2.9	2.8	0.0	2.9	2.8	2.8	0.1	2.9	2.8	2.8	0.1	2.6	3.0	2.7	-0.2	2.9	2.7	2.7	0.2
(Difficulty of contents) (11) The level of the course contents was (A. too high/ B. high/ C. low/ D. too low).	2.0	2.6	2.0	-0.3	2.0	2.2	2.3	-0.2	1.8	2.7	2.1	-0.6	1.8	2.3	2.3	-0.5	2.9	2.2	2.3	0.6

※過去3年間の評価係数（3点満点）および遠隔（2020）と実地対面（2019-2018 平均）との差

(12) 大学院共通科目部会

○「大学院共通科目部会」の活動

- ・大学院共通科目実施要綱を令和2年7月16日の共通教育部門会議において審議了承した。その中で科目群を I:横断型基盤科目, II:地域サステナビリティ科目の2群に分け, 大学院共通科目の役割を規定した。また, 遠隔授業 (VCS) の運営方法についても規定した。
- ・上記の大学院共通科目の役割に対応するために, 科目の見直しを行い, 茨城大学院共通科目規程を一部改正した。
- ・令和元年度前期・令和2年度後期開講の科目についてFD活動を行い, 科目運営が円滑になされていることを確認した。

(13) 数理・情報・データサイエンス部会

○部門の活動（特色ある業務）

SDGs や超スマート社会 (Society5.0) , 第4次産業革命など, 社会変化が激しく予測不可能な時代において, 数理・データサイエンス教育が未来社会を開くと期待されている。本専門部会では, AI・データサイエンスと社会の関りを学ぶことを目的に, 「AI・データサイエンス入門」を3Q, 4Qにて開講している。全8回のオムニバス形式で実施し, 部会のメンバーであるIT基盤センターおよび工学部, 全学教育機構の教員が担当している。

また, 当該年度では「AI・データサイエンス基礎演習」を4Qに本格開講した。この科目は, AI・データサイエンスの仕組みとして技術的な基礎を演習にて学ぶことを目的とし, 教員2名(機構, IT基盤センター), TA(1名)にてBYOD科目として全8回で実施した。前半4回ではデータサイエンスに関する演習, 後半4回では深層学習の基礎としてのニューラルネットワークに関する演習を行った。

○学生支援部門

1. バリアフリー推進室関連

① 学生相談件数

バリアフリー推進室カウンセリング件数は、コロナ禍での入構制限などにより減少したが、オンラインを活用した面談等の充実を図ることで対応することができた。

バリアフリー推進室	区分	水戸	日立	阿見	計
キャンパス別・相談件数	延べ人数（名）	1103	315	271	1689
	実人数（名）	120	52	43	215

※ 過去相談件数との比較

2019年度（水戸・日立・阿見 合計）：延べ人数 2226名 実人数 305名

② 授業等における合理的配慮手続き

- ・配慮に向けての相談及び実際の手続き等を行った人数 22名
- ・これらの学生が受講する各授業の配慮内容検討と各部局との適切な配慮の調整等をコーディネートした。

③ 2021年度入試における障害等のある入学志願者の事前相談

- ・受験上等配慮人数 実人数 13名
- ・申請のあったこれら受験者の適切な配慮について、受験者とのやり取り、当該部局との適切な配慮の調整等を行った。

④ ピアサポーターの育成

2018年度から学内における専門ピアサポーター認定制度を整備し、研修や認定試験合格後に全学教育機構長による認定を行っている。

1) 専門ピアサポーター認定学生数 17名（院生1名含む）

2) 専門ピアサポーター養成講座（研修会）開講及び認定試験実施：計20回

⑤ アクセシビリティリーダーの育成

多様な可能性を開拓する社会の構築推進をしていくために、必要なアクセシビリティに関する知識・技術・経験とコーディネート能力をもった人材を輩出することを目的とした、アクセシビリティリーダーの育成のための体制整備等を行っている。

2020年度は、2級アクセシビリティリーダー認定試験（アクセシビリティリーダー育成協議会主催）に16名（院生1名含む）の合格者を輩出した。

⑥ 障害のある学生を対象とした自主学習室の整備

2017年度に開設し、試験的に運用していた主に発達障害や精神障害のある学生の学習や休息のスペースである自主学習室（やすらぎルーム、水戸キャンパス共通教育棟1号館131室）について、2018年度より運用を本格始動し、2020年度も一定の需要があった。

※ 2020年度利用学生数 延べ人数 20名

2. キャリアセンター関連

1) 令和3年3月卒業生の進路状況

・令和2年度における学部卒の就職・進学率は95.4%（前年度95.1%）、大学院卒では93.8%（前年度90.7%）となっており、例年と同様の率で推移した。

2) 令和3年3月卒業生および令和4年3月卒業予定学生の動向及び支援

（資料2-C-01：茨城大学水戸地区合同企業WEB説明会）

（資料2-C-02：茨大キャリアセンターMondayLIVE）

（資料2-C-03：就活継続セミナー）

・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下において、就職支援についても新たな対応が必要となった。（令和3年3月の合同企業説明会はオンライン形式で実施など）

・遠隔授業及び入構規制により、就職活動などに不安を抱える学生に対し、新たな支援（遠隔実施のため3キャンパス学生参加可）として、キャリア相談の遠隔化（Web、電話）及び予約制の相談に加え、事前予約不要のフリー相談を新設し、学生の利便性向上を図った。

・就職ガイダンスをWeb（Teams）で実施（※昼休み時間帯に複数回ライブ配信）し、緊急事態宣言解除後の6月以降は「就活リスタート講座（履歴書・ES対策、企業研究、面接対策）」「オンライングループディスカッション・面接練習会」「就活継続セミナー」などを複数回実施した。

※茨大キャリアセンターMondayLIVEを開催。新型コロナウイルス感染症の影響で孤立しがちな就活生に向け「つながり」を感じてもらうことを目的として毎週月曜日の昼休みにTeamsを使用し15分間のライブ放送を実施した。



【茨大キャリアセンター Monday LIVEの様子】

・公務員からの進路変更者や就職活動を継続している学生への支援として、カウンセラーが継続的に支援するオーダーメイドサポートを実施し、応募書類の添削や模擬面接、就職活動の進め方の相談など、それぞれの学生のニーズや悩み、課題に寄り添い、個別性を重視した対応を行った。

3) キャリアセンターの取組について

- ・キャリアセンターでは就職支援に加え、学生のライフデザイン形成などへの支援を行っている。
- ・日立キャンパス(工学部)及び阿見キャンパス(農学部)でも、就職相談コーナーの支援を行っている。

① 就職ガイダンス ※全てオンライン開催

(資料2-C-04：就職ガイダンス実績)

(資料2-C-05：就職ガイダンス実施日程)

- ・「インターンシップ直前対策」「職務適性テスト」「自己分析講座」「面接対策講座」など、年間を通して就職活動の時期に合わせた様々な就職ガイダンスを開催した。
- ・留学生向けの就職ガイダンスを開催した。
- ・各業界の企業を招く「業界・企業研究会」、公的な仕事を理解するための「国家・地方行政機関等業務説明会」、実践的な採用試験対策講座として「グループディスカッション対策講座」「個人面接練習会」などを定期的な就職ガイダンスとは別に開催した。

② キャリア教育

(資料2-C-06：ライフデザイン・シラバス)

- ・学生が自身の個性と仕事を理解し、主体的に進路を選択するためのキャリア教育を行っている。
 - 1年次生には地域志向科目の「茨城学」
 - 1～2年次生には「仕事を考える」
 - 3年次生には必修授業科目「ライフデザイン」を学部ごとに開講。

③ キャリア相談 ※キャリア相談の遠隔化（Web，電話）で対応

- ・キャリアセンターや工・農学部のキャリア相談コーナーでは、キャリアカウンセラー及び企業の人事経験者により、学生一人ひとりに合わせたきめ細かな指導や相談を行っている。
- ・相談内容は、進路、就職活動に関する悩み事相談、エントリーシートの添削、模擬面接の実施など、就職活動中の学生に限らず、1・2年次生も気軽に相談できるようになっている。障害を持つ学生への情報提供や支援も行っている。

※2020年度（延べ人数：水戸1938人，日立1073人，阿見189人）

④ インターンシップ

- ・企業、団体やその仕事内容を理解することは、進路を決定する上でとても重要である。キャリアセンターでは、企業・団体の中で研修生として働くことができるインターンシップへの参加を推奨している。
- ・インターンシップのための「業界研究講座」「マナー講座」などの事前・事後指導など、学生がインターンシップに踏み出すためのサポートを充実させている。

- ・令和2年度はコロナ禍の影響もあり減少した。

⑤求人票，就職ガイダンス，インターンシップ等各種情報の発信

- ・学生は情報配信システム「茨大キャリアナビ」を使用し，パソコンやスマートフォンを使って企業からの求人情報や，キャリアセンターからの案内などを見ることができる。
- ・求人については，県内外の企業から本学生に向けた求人を閲覧できる。（年間約2万3千件）

⑥主な学内イベント

（資料2-C-07：地方行政機関等業務説明会案内）

- ・大学主催学内合同企業説明会（Webで実施）

2019年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から中止したが，2020年度は，水戸・日立地区で開催した。 ※別途「茨大生限定のWEB個別企業説明会」も実施

- ・業界・企業研究会

主に次年度卒業予定者を対象として，キャリア教育の一環として，早くから業界や企業，仕事の内容を知る機会の提供を目的に行っている。企業の担当者を学内に招き，業界・企業の研究を行うイベント。

- ・国家・地方行政機関等業務説明会

公務員を志望する学生を対象として，国及び地方行政機関や特殊法人など，約30団体が参加し，業務説明を行うイベント（2月に開催）。

3. 学長と学生の懇談会 主催（資料2-C-08：2020年度前学期 学長と学生の懇談会（実施報告），資料2-C-09：2020年度後学期 学長と学生の懇談会（実施報告））

① 2020年度前学期 学長と学生の懇談会

日時：2020年6月24日（水）13：30～15：10

場所：オンライン（Teams），教職員は共通教育棟1号館第一会議室

内容：新型コロナウイルス感染症拡大の影響による本学の課外活動規制について，現在の大学が検討している段階的な緩和の方針を提示した後，各課外活動団体の考えや意見等を尋ねた。

参加者：学生39名（課外活動団体30団体），教職員12名（太田学長，久留主理事・副学長ほか）。

成果：学生たちからの質問や意見を受け付け，議論を行うことで，部活動・サークルなどの課外活動の再開方針を決めることができた。

② 2020年度後学期 学長と学生の懇談会

日時：2021年2月10日（水）9：30～12：00

場所：オンライン（Teams）

内容：2020年12月に太田学長より「イバダイ・ビジョン2030（素案）」が示されたことを受け，

学生の考える（想う）「2030年の茨城大学の姿」について、学長をはじめ大学執行部教職員と学生が直接対話した。

参加者：学生86名、教職員5名（太田学長、久留主理事・副学長ほか）。

成果：「イバダイ・ビジョン 2030」の策定にあたっては、学生との意見交換の場を持つことで、学生の意見を反映することができた。



【オンラインでの懇談会に臨む太田学長】



【オンライン懇談会の様子】

4. 学生支援に関するFD/SD 主催（資料2-C-10：ゲートキーパー養成講座資料）

① ゲートキーパー養成講座

日時：2020年12月15日（火）14:20～15:50

場所：オンライン（Teams）

内容：布施保健管理センター長より、大学生の自殺を防ぐための対応などについて、説明があった。

参加者：教職員144人

成果：講座終了後の参加者を対象としたアンケート調査（回答者87人）より、90%がゲートキーパーへの理解が深まったと評価していることが確認された。

5. 各学部における学生担任マニュアルの実質化

前年度の令和元年度までに学部ごとの「担任マニュアル」が試行的に策定実施されていたが、試行期間の実施状況を鑑み、また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により担任による学生への細やかな把握がより重要になったことから、各学部とも学部に応じたより実質的なものに修正がなされ、教職員への周知も進められた。

6. 課外活動（サークル活動）再開に向けた取組

① 茨城大学課外活動（サークル活動）再開に向けた研修会の開催

活動自粛となっていた課外活動の再開に伴い、課外活動団体の学生へ向けた感染症対策に関する研修会を開催した。

目的：学内での課外活動再開を前に、本学課外活動団体に対して感染防止対策に関する講習会を開催し、感染防止の一助とすること。

※学内で活動を再開するためには、本研修会の受講を義務づけ。

※対面式研修会参加学生以外は、録画した本研修会動画を10月19日までに視聴。

対象：本学課外活動団体に所属する代表者2名（必須）

場所：水戸キャンパス（講堂）、
日立・阿見キャンパス（Teams で実施）

日時：10月12日～15日

講師：保健管理センター所長 布施泰子（研究分野：精神神経科学）
人文社会科学部 教授 加藤敏弘（研究分野：スポーツ社会学）



【布施保健管理センター所長による講義】



【加藤人文社会科学部教授による講義】

○国際教育部門

・国際教育部門の令和2年度の活動記録は以下のとおりである。

【部門の活動】

月	活動記録
4月	4月22日ー交換留学継続生のためのガイダンス 外国人留学生新入生ガイダンス チューターガイダンス 4月24日ー工学部の先輩留学生との交流会【つながろうプロジェクト第1弾】
5月	5月17日ーいっしょに作って食べよう！【つながろうプロジェクト第2弾】 5月18日～6月5日ーアメリカ・ペンシルバニア州立大学との授業交流（人間とコミュニケーション：Japanese Pop Culture A）
6月	6月8日ーオンライン海外留学説明会（6月8日よりオンデマンド配信） 6月15日～8月3日ーアメリカ・ペンシルバニア州立大学との授業交流（日本語教授法II） 6月26日ーZOOMで映画鑑賞会&ディスカッション【つながろうプロジェクト第3弾】 6月29日・7月1日・3日ーオンライン海外留学サロン【つながろうプロジェクト第4弾】
7月	7月11日ー茨城大学元留学生のためのオンライン親睦会【つながろうプロジェクト第5弾】 7月12日・18日・19日ー日本の祭りで踊ろう！【つながろうプロジェクト第6弾】 7月29日ーアメリカ・ペンシルバニア州立大学との授業交流（人間とコミュニケーション：Japanese Pop Culture B）
8月	8月上旬ーリモート水戸黄門まつりへの参加 8月17日～25日ーブルネイ・ダルサラーム短期語学・文化研修（オンライン） 【資料2-D-1-01】 8月24日～9月4日ー韓国語研修（オンライン） 【資料2-D-1-02】
9月	9月（メール会議）ー茨城県高等教育機関留学生関係担当者連絡会 9月24日ー日本語研修コースオリエンテーション 9月26日ーJALT Study Abroad SIG Conference 2020 9月30日ーTOEFL-ITPの開催
10月	10月1日～11月30日ーオーストラリア・ニューサウスウェールズ大学との授業交流 10月9日～12月18日ー海外協定校との授業交流（日本語教授法演習） 10月12日～12月7日ーアメリカ・ミシガン州立大学との授業交流（日本語教授法I） 10月20日～2月28日ータンデム学習プロジェクト 10月21日ー水戸市防災課と地域住民との防災訓練 10月28日ー交換留学説明会・報告会

	10月31日ーオンライン坐禅ワークショップ【つながろうプロジェクト第7弾】
11月	<p>11月（メール会議）ー茨城地域留学生交流推進協議会</p> <p>11月4日ー春季オンライン短期海外研修説明会・報告会</p> <p>11月9日ー地域の国際化を考える円卓会議（阿見町との地域連携事業）</p> <p>11月13日ーオンライン国際交流パーティー【つながろうプロジェクト第9弾】</p> <p>11月16日～27日ー海外留学個別相談&オンライン留学相談窓口</p> <p>11月18日・20日ーアメリカ・ウィスコンシン大学スペリオル校との授業交流（Studies in Particular Field）</p> <p>11月30日ーiOP チュートリアル「人権問題について考えよう」成果発表会</p> <p>11月30日ー日本語研修コースレベル4（総合）データセッション</p>
12月	<p>12月12日ー折り紙ワークショップ【つながろうプロジェクト第8弾】</p> <p>12月19日ー学生国際会議</p>
1月	<p>1月13日ーTOEFL-ITPの開催</p> <p>1月13日～15日ーベトナム・ハイフォン大学との授業交流（日本語教授法I）</p> <p>1月21日ー日本語教育プログラムガイダンス</p> <p>1月29日ー日本語研修コースレベル4（総合）データセッション</p> <p>1月13日～3月3日ー阿見町国際交流協会「日本語教育ボランティア養成講座」への講師派遣</p>
2月	<p>2月1日ー悩みをシェアして，ゲームで交流しましょう</p> <p>2月15日～3月5日ーオーストラリアオンライン短期語学研修（オンライン） 【資料2-D-1-03】</p> <p>2月5日～26日ー公開講座「多文化理解パートナー育成講座ー茨城の多文化共生を考える」（オンデマンド配信）</p> <p>2月15日～26日ー韓国語短期海外研修（オンライン） 【資料2-D-1-04】</p>
3月	<p>3月1日～9日ーベトナム日本語教育短期海外研修（オンライン） 【資料2-D-1-05】</p> <p>3月8日～26日ースペイン語短期海外研修（オンライン） 【資料2-D-1-06】</p> <p>3月8日～19日ーマレーシア短期英語研修（オンライン） 【資料2-D-1-07】</p> <p>3月9日ーベトナム・日本語教育短期海外研修（オンライン） 参加者報告会</p> <p>3月13日ー茨城大学リカレント教育プログラム「2020年度多文化理解パートナー育成講座ふりかえりセッション」</p> <p>3月17日ー国際交流のためのオンラインふろしきワークショップ【つながろうプロジェクト第10弾】</p> <p>3月19日ー新交換留学生向けオリエンテーション</p> <p>3月21日ーコロナ禍のグローバル教育を考える～茨城大学の挑戦～ シンポジウム</p>

【特色ある業務】

1. オンラインを駆使した海外協定校との授業交流活動の実施

① 「日本語教授法 II」（2020 年度前学期）

- 茨城大学の学生 25 名とアメリカ・ペンシルバニア州立大学の学生 23 名がオンラインによる以下の交流活動を行った。
 1. 茨城大学の学生が Zoom で ペンシルバニア州立大学の日本語授業に参加し、授業観察を行った。
 2. 茨城大学の学生がペンシルバニア州立大学の日本語授業で 15 分間の応用・発展ドリルの模擬授業を行った。
 3. 茨城大学の学生とペンシルバニア州立大学の学生が 4 名程度のグループを作り、授業外で週 1 回程度交流した。



② 「Japanese Pop Culture A」（2020 年度第 1 クォーター）

- 茨城大学の学生 35 名とアメリカ・ペンシルバニア州立大学の学生 11 名が 3 週間（5 月 18 日～6 月 5 日）にわたって毎晩オンラインによる交流を行った。交流では、日本のポップカルチャーについて日本語で約 30 分間話し合った。



③ 「Japanese Pop Culture B」（2020 年度第 2 クォーター）

- 茨城大学の学生 37 名とアメリカ・ペンシルバニア州立大学の学生 24 名がオンラインによる交流を 7 月 29 日（水）の夜に 1 時間半行った。交流会に向けて、茨城大学の学生がオンラインでできる交流活動を企画し、実践した。

④ 「英語コミュニケーション」（2020 年度第 2 クォーター）

- 茨城大学の学生 19 名とアメリカ・ペンシルバニア州立大学の学生 24 名が計 8 回各 30 分間の英語による交流を行った。

⑤ 「日本語教授法 I」（2020 年度後学期）

- 茨城大学の学生 16 名とアメリカ・ミシガン州立大学の学生 30 名と計 6 回各 60 分間の日本語による交流を行った。交流では、茨城大学の学生が日本語によるコミュニケーション活動を企画し、実践した。
- 茨城大学の学生 16 名とベトナム・ハイフォン大学の学生 25 名と計 6 回各 90 分間の日本語による交流を行った。交流では、茨城大学の学生が日本語によるコミュニケーション活動を企画し、実践した。



⑥ 「日本語教授法演習」（2020 年度後学期）

- 茨城大学の学生 14 名がウィスコンシン大学スペリオル校（アメリカ）、ペンシルバニア州立大学（アメリカ）、アイオワ大学（アメリカ）、ニューカッスル大学（イギ

リス），インドネシア教育大学（インドネシア），マレーシア科学大学（マレーシア），仁済大学（韓国）の日本語授業においてオンラインによる教壇実習を行った。

- ⑦ 「Studies in Particular Field」（2020年度第3クォーター）
- ・ 茨城大学の学生10名とアメリカ・ウィスコンシン大学スペリオル校の学生9名が日本語・英語による交流会を11月に2回（それぞれ60分間）を行った。交流では、茨城大学の学生がオンラインでできる交流活動を企画・実践した。
- ⑧ 茨城大学工学部の教員が主となり、茨城大学の学生40名とオーストラリア・ニューサウスウェールズ大学の学生40名による約8週間のオンライン交流プロジェクト行われた。

2. オンライン短期海外研修の企画及び実施

新型コロナウイルスの感染拡大で学生を海外へ派遣できないなか、国際教育部門ではオンラインによる短期海外研修の実施を積極的に行った。

- ① 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（ブルネイオンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（ブルネイオンライン）」（8月17日～24日）を開講した。本学より19名の学生がブルネイ・ダルサラーム大学の提供する短期語学・文化研修に参加した。



- ② 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（韓国オンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（韓国オンライン）」（8月24日～9月4日及び2月15日から26日）を開講した。本学より計10名（夏季9名，春季1名）の学生が韓国・インジェ大学の提供する短期韓国語研修に参加した。

- ③ 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（スペインオンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（スペインオンライン）」（3月8日～26日）を開講し，本学より2名の学生がスペイン・アルカラ大学の提供する短期スペイン語研修に参加した。

- ④ 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（オーストラリアオンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修ⅠⅡ（オーストラリアオンライン）」（2月15日～3月5日）を開講し，本学より2名の学生がオーストラリア・カーティン大学の提供する短期英語研修に参加した。

- ⑤ 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（マレーシアオンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修（マレーシアオンライン）」（3月8日～19日）を開講し，本学より6名の学生がマレーシア・マレーシア科学大学の提供する短期英語研修に参加した。

- ⑥ 「短期海外研修Ⅰ・Ⅱ（ベトナムオンライン）」の開講

基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修（ベトナムオンライン）」（3月1日～9日）を開講し、本学より3名の学生がベトナム・ハイフォン大学の提供する短期研修プログラムに参加した。



【関連イベント報告】

①こんな時だからこそつながろう！ 茨城大学国際交流プロジェクトの企画・運営

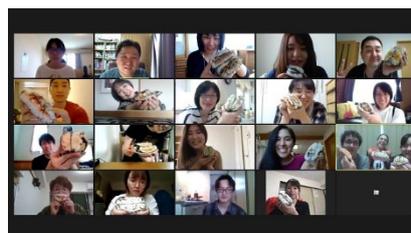
新型コロナウイルスの感染拡大で、国や地域を超えた移動に制限がかかったことから、オンラインによる国際交流活動を企画・運営した。

第1弾：「工学部の先輩留学生との交流会」（4月24日，参加者4名）

工学部の先輩留学生と新入留学生の交流会をオンライン上で行った。教科書の購入方法や工学部での勉強方法などのアドバイスがあり、先輩の「生」の声を聞け、とても役に立っているようだった。

第2弾：「いっしょに作って食べよう！」（5月17日，参加者22名）

イベントでは、ZOOMをつないで、参加者が各自自宅から「おにぎらず」を作った。そして、作った後は、小グループに分かれて、おしゃべりをしながら、食べた。その後、4月から水戸市のごみ分別が難しくなったこともあり、ごみ分別のクイズ大会を行った。久しぶりに顔を合わせて交流をし、参加者は楽しいひと時を過ごしていた。



第3弾：「ZOOMで映画鑑賞会&ディスカッション」（6月27日，参加者約40名）

【資料2-D-2-01】

イベントでは、まず和歌山県太地町のイルカ漁を題材にしたドキュメンタリー映画『おクジラさま ふたつの正義の物語』を視聴した。映画視聴後は、小グループに分かれてディスカッションを行い、映画に対する理解を深めた。シドニー工科大学（オーストラリア）、ニューカッスル大学（イギリス）、ペンシルバニア州立大学（アメリカ）、ウィスコンシン大学スペリオル校（アメリカ）、モンタナ州立大学（アメリカ）、ブルネイ・ダルサラーム大学（ブルネイ）、インジェ大学（韓国）からの参加があり、さまざまな観点からディスカッションが行われている姿が印象的だった。



第4弾：「オンライン海外留学サロン」（6月29日，7月1日，3日，延べ参加人数約60名）

【資料2-D-2-02】

サロンでは，まず国際交流課のスタッフが茨城大学の交換留学制度について説明をした。その後，海外留学担当の教職員や留学経験者が参加者の質問に答えた。



第5弾：「茨城大学 元留学生のためのオンライン親睦会」7月11日，参加者32名）

【資料2-D-2-03】

元留学生16名，元チューター4名，現役留学生1名，現役チューター3名，元教員2名，現教職員6名の合計32名が参加した。それぞれ自分の好きな飲み物・食べ物を持ち寄って，それを楽しみながら，思い出話に花を咲かせた。世界中の茨大生が世代を超えて，また，過去・現在の茨大生がつながっている姿がとても印象的だった。



第6弾：「日本の夏祭りで踊ろう！」（7月12日，18日，19日，延べ参加人数約30名）

【資料2-D-2-04】

水戸の夏の風物詩「水戸黄門まつり」が「Remote」で開催されることになったことから，茨城大学の留学生・日本人学生・教職員，海外協定校の学生からの参加者を募り，茨城と海外から「Remote水戸黄門まつり」に参加した。Remote水戸黄門まつりでは，ダンス動画のコンテストが行われていたことから，ダンスの練習をオンライン上で計3回行い，モンタナ州立大学（アメリカ），シドニー工科大学（オーストラリア），インドネシア教育大学（インドネシア）の学生と一緒に交流を交えながら行った。



第7弾：「オンライン坐禅ワークショップ」（10月31日，参加者39名）

【資料2-D-2-05】

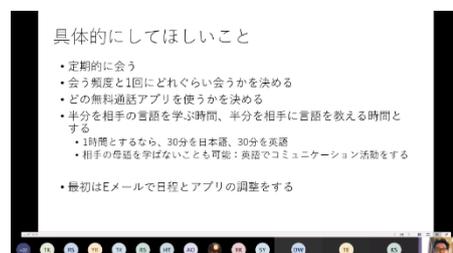
ワークショップでは，水戸市祇園寺の副住職による坐禅の説明，体験を行った。参加者からは「今のご時世，坐禅をして心を落ち着ける機会はとても重要でした」（日本人学生），「COVID-19のなかでもたくさんの新しい日本の文化をオンラインで学ぶことができた」（協定校の学生），「2021年4月から茨城大学に交換留学したら（もしできれば…），祇園寺を訪れたい！」（協定校の学生）など，肯定的な声が聞かれた。ワークショップのあとは，少人数に分かれたグループディスカッションを行い，参加者同士で交流を深めた。



**第8弾：「タンデム学習プロジェクト」（2020年10月～2021年2月，
参加者72名（茨城大学），97名（協定校））**

【資料 2-D-2-06】

本学の学生72名と協定校の学生97名がペア・グループとなり、2020年10月から2021年2月にかけてウェブ会議システム（SKYPE や ZOOM 等）を用いてタンデム学習を行った。タンデム学習とは、母語の異なる者同士がペアとなり、互いの言語や文化を学びあう学習形態のことである。本プロジェクトでは、定期的に情報交換会を開催し、タンデム学習の進捗状況を確認した。そこでは、タンデム学習についてだけでなく、自身の留学の計画や自身が抱えている留学に関する疑問について話す姿も垣間見られ、コロナ禍においても留学に関する情報交換の場を創出することができた。



第9弾：「国際交流のためのオンラインおりがみワークショップ」（12月12日，参加者74名）

【資料 2-D-2-07】

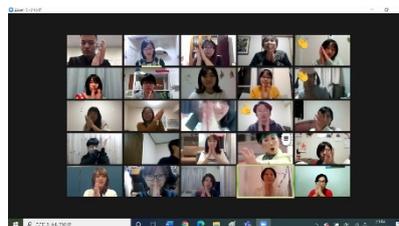
海外からの参加者も事前に折紙を受け取り、ワークショップでは、日本折紙協会の講師の日英両言語による指導の下、ペンギン、富士山、鶴を折った。その後、少人数に分かれたグループディスカッションを行い、参加者同士で交流を深めた。



第10弾：「オンライン国際交流パーティー」（11月13日，参加者約60名）

【資料 2-D-2-08】

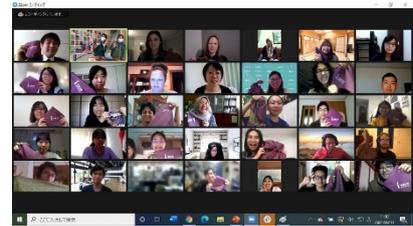
イベントの前に、日本国内在住の参加者は「茨城の味覚セット」を受け取り、茨城大学グローバル教育センターが編集した「お蕎麦のゆで方」のビデオを視聴して、自分達で「そば」や「けんちん汁」を事前に準備して、参加した。そして、準備したそばを堪能しながら、学生スタッフが準備したゲームや活動に参加した。参加者たちが楽しそうにしている姿がとても印象的だった。



第11弾：「国際交流のためのオンラインふろしきワークショップ」（3月17日，参加者約90名）

【資料2-D-2-09】

参加者には茨城大学のロゴが入った風呂敷をワークショップ前に送付し，ワークショップではそのオリジナル風呂敷を使って，山田繊維株式会社の方の指導の下，風呂敷の使い方を学んだ。今年度最後となった「つながろうプロジェクト」だったが，協定校の学生・教職員，茨城大学の学生約400名が参加申込をする人気のイベントとなった。当日は，各協定校から先着順で参加者を選び，約80名が参加した。参加者からは，「イベントはとても楽しく，講師はとても親切でした。風呂敷の使い方や歴史をたくさん学ぶことができました」などの声が聞かれた。



② 学生国際会議の開催

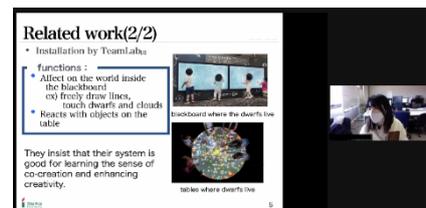
12月19日，第16回茨城学生国際会議をオンライン上にて開催した。本学の学生スタッフが主体となり企画運営を行い，のべ113名の本学の学生・留学生，茨城県内の高校生が参加した。本会議は，グローバルな視点を持ち，国際化が進む社会の中で活躍できる人材の育成を目的とした，学生が主体となり企画・運営を行う学生による学生のための国際シンポジウムである。今年度は，Covid-19感染拡大防止のためオンラインで実施することとし，「どこにいる人でも誰であっても一緒に活動ができればいいな」という思いを込め，「Stand by you ~with online~」というテーマを掲げ，開催した。例年は，茨城学生国際会議という名前のおり県内の学生のための会議としていたが，2020年度はオンラインの利点を活かし，県内の高校・大学のほか，本学の海外協定校にも参加を呼びかけた。例年よりも規模を縮小した形ではあったが，発表者・聴講者合わせて113人の参加があり，多くの国の学生との間で学術発表及び交流会を行うことができた。



【内容】

(1) 研究発表（口頭発表・ポスター発表）

発表者は6つのトピック（「Humanities and Society」「Education」「Science and Engineering」「Agriculture」「Ibaraki」「Student Life」）から一つトピックを選び，口頭またはポスターで研究発表を行う。「Ibaraki」「Student Life」のように，専門的な分野だけでなく地域や自分の体験に関わるトピックも用意し，高校生が参加しやすい環境づくりを行った。



参加者の内訳は，発表者51名，聴講者62名であり，発表者の所属大学及びトピックは下記のとおりである。

		Humanities and Society	Education	Science and Engineering	Agriculture	Ibaraki	Student Life	計
日本	茨城大学	2		22	2			26
	常総学院	1	2	1		1		5
	牛久栄進高校					7		7
インドネシア	ウダヤナ大学	1						1
	ガジャマダ大学			1				1
	ボゴール農科大学			2				2
	Nusa Bangsa University			1				1
フィリピン	デラサール大学	2						2
	フィリピン大学		1					1
中国	武漢科技大学	1		1				2
マレーシア	マレーシア科学大学			1				1
スリランカ	Swinburne University of Technology			1				1
ブラジル	Federal University of Viçosa	1						1
	計	1	0	0	0	0	0	1

(2) 交流会

学術発表後に、交流会として、自己紹介ゲーム、しりとり、絵しりとりを行った。交流会を通して、学術的な視点とは異なる部分で参加者同士が国際的な交流を深めることができた。



【参考】

聴講者出身大学等

- ・イギリス：ニューカッスル大学
- ・ブルネイ：ブルネイ・ダルサラーム大学
- ・フィリピン：デラサール大学、フィリピン大学
- ・インドネシア：ガジャマダ大学、アンダラス大学、ボゴール農科大学、インドネシア教育大学、ウダヤナ大学、Diponegoro University, Ahmad Dahlan University
- ・日本：茨城キリスト教学園高等学校、常総学院、茨城大学
- ・マレーシア：マレーシア科学大学
- ・タイ：カセサート大学

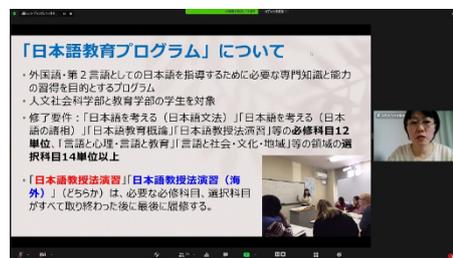
③ JALT Study Abroad SIG Conference の開催

9月26日、JALT Study Abroad SIG との共催で『JALT Study Abroad SIG Conference 2020』をオンライン上で行った。Conference は完全オンラインで行われ、本学の学生ボランティアが、ソーシャルディスタンスを保ちながら、会議室でオンライン配信の補助を行った。80名近くの参加者が集まり、海外留学に関して意見交換が行われた。参加者からは、「アットホームな雰囲気、意見を出しやすい会だった」、「オンラインなりのよさがあった」、「オンラインでも対面と同様の内容を行っていたのが素晴らしいと思った」、「茨城大学のチームワークに感心した」と肯定的な声が聞かれた。

④「コロナ禍のグローバル教育を考える～茨城大学の挑戦～」シンポジウム

【資料 2-D-3-01】

3月21日、「コロナ禍のグローバル教育を考える～茨城大学の挑戦～」シンポジウムをオンライン上にて行った。第1部は「コロナ禍の日本語教育を考える～海外協定校とのオンライン日本語教育実習を例として～」と題して、2020年度後学期に海外協定校の日本語担当教員と協働で行った日本語教育実習について協定校の担当教員を招いてディスカッションをした。第2部では「コロナ禍のオンライン国際協働学習を考える～海外協定校とのオンライン交流授業を例として～」と題して、2020年度に茨城大学で行われた海外協定校とのオンライン交流活動をそれぞれの担当教員が紹介した。第3部では、ブレイクアウトルーム機能を用いて、コロナ禍の日本語教育実習、コロナ禍の国際協働学習、コロナ禍の海外留学、コロナ禍の学内での学生交流・地域交流についてそれぞれグループに分かれて話し合った。シンポジウムには各回130名近くが参加した。また、本学の協定校であるアイオワ大学（アメリカ）、ウィスコンシン大学スペリオル校（アメリカ）、仁済大学（韓国）、マレーシア科学大学（マレーシア）の教員も登壇し、国際的な連携を強める機会となった。参加者からは、「協定校としっかりと信頼関係を築き、協働学習を実践されていることに感銘を受けました」、「コロナ禍のオンライン教育について、教育実習、英語と日本語のタンデム、理系留学、様々な方面から考える機会となりました」などの声が聞かれた。



⑤地域連携

(1) 阿見町との連携

茨城大学社会連携センター支援事業地域研究・地域連携プロジェクトの支援を受け、阿見町町民活動課と連携し、11月9日に阿見町の国際化と在留外国人に対する支援について話し合う円卓会議を実施した。会議を通して、地域が抱える課題を確認することができた。その課題を解決する方法の一つとして、阿見町国際交流協会が主催する「日本語教育ボランティア養成講座」にグローバル教育センターの教員を講師として派遣した。



(2) 水戸東ロータリークラブ・茨城大学ローターアクトクラブとの連携

11月13日に実施した国際交流パーティーでは、水戸東ロータリークラブ及び茨城大学ローターアクトクラブの協力を得て、そばのゆで方、そばの打ち方を紹介する事前ビデオ (<https://youtu.be/YW6Yca073fy>) を作製した。パーティーの参加者は事前にそばやけんちん汁を含む「茨城の味覚セット」を受け取り、事前ビデオを視聴し、自分たちで準備をして、パーティーで一緒に食べた。



〔資料：留学生向け日本語教育（単位なし）〕

前期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル3（総合）	八若寿美子	水戸	15	15
日本語レベル3（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル3（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3（漢字）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル3（口頭表現）	八若寿美子	水戸	15	15
日本語レベル4（漢字）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5（総合）	非常勤	水戸	15	15
多読で学ぶ日本語	池田庸子	水戸	15	15
日本事情	青木香代子	水戸	15	15
初級日本語 II	瀬尾匡輝	阿見	30	30
初級日本語 IV	瀬尾匡輝	阿見	15	15
アカデミックジャパニーズ	瀬尾匡輝	阿見	30	30
サバイバル日本語	瀬尾匡輝	阿見	15	15

後期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル4（総合）	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4（口頭表現）	八若寿美子	水戸	15	15
日本語レベル4（応用）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4（漢字）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5（総合）	非常勤	水戸	15	15
多読で学ぶ日本語	池田庸子	水戸	15	15
日本事情	青木香代子	水戸	15	15
日本研究	安龍洙	水戸	15	15
初級日本語 III	瀬尾匡輝	阿見	30	30
初級日本語 IV	瀬尾匡輝	阿見	15	15
サバイバル日本語	瀬尾匡輝	阿見	15	15